

はしがき

本書のタイトルは『貧困理論の再検討』である。このタイトルのなかに含まれている「貧困理論」ということはを初めて聞く読者も多いかもしれない。確かに、「貧困理論」ということは、日本の貧困研究のなかでこれまでほとんど使用されてこなかった。邦文の先行研究において、貧困問題に対する理論的なアプローチを「貧困理論」と打ち出しているものは、ざっとみる限りでは三つを除いては存在しなかった。

しかしその三つの論文のうち二つは、日本の研究者によって整理され提示されたオリジナルな研究ではなく、訳語として用意されたものである。

まず一つ目としては、『イギリス社会政策論の新潮流——福祉国家の危機を超えて』（原題は *Social Policy and Social Welfare*, Loney, Boswell and Clarke 1983）に収録されている P・タウンゼントの論文の節題である 'A Theory of Poverty' を「貧困理論」と訳している。そして二つ目は、『イギリスにおける貧困の論理』（原題は *Povert, Inequality and Class Structure*, Wedderburn 1974）に収録されている A・H・ハルゼーの論文の、これもやはり節題に付されている 'The Theory of Poverty' を「貧

困理論」と訳している。

国内のオリジナルな研究において「貧困理論」ということばを使用しているのは、萩原康生（1997）の「発展途上国における貧困と不平等」という論文においてである。同論文に含まれる節題には「貧困理論の展開」と付されている箇所がある。しかし、これは貧困理論というよりも開発理論であり、先述した二つのイギリス貧困理論とは趣を異にしている。

先述した二つの論文は、ともにイギリスにおける研究であり、イギリス貧困理論の先進性を物語るものである。これに対し、日本では貧困についての理論的研究が少ないため、単に「貧困論」と呼ばれるものはあるが、「貧困理論」と呼びうるものはあまりなかった。

では「貧困論」と「貧困理論」の違いはどのような点にあるのだろうか。決定的に異なるのは、「貧困理論」は貧困とは何かという根本的な問いから出発しているのに対して、「貧困論」は必ずしもそうではないという点にある。「貧困とは何か」という問いなくして貧困であるという判断は成立しないが、日本ではそれがあまり問われることなく「貧困論」ばかりが先行している。それは、とりあえずよって以て立つ何らかの貧困理論を前提としているからであろう。このとりあえずの貧困理論は、大抵の場合、イギリス貧困理論であり、タウンゼントによる「相対的剥奪 (relative deprivation)」から定義される貧困概念によって形成される理論である。

ところが近年、国内外を問わず多くの貧困に関係する実証的研究や新聞記事などをみると、もはやタウンゼントの貧困理論では説明できない新しい要素が「貧困である」と判断され、記述されて

きているのを見出すことができる。それはすでに社会の貧困に対する認識がタウンゼントの理論を超えているということの意味している。本書は、そのような直感的・経験的にすでに「貧困である」と社会によって認識され判断されているものがどのような意味内容であるのかを記述しようとする試みるものである。

ところで、貧困問題に対する理論的アプローチは、反貧困の実践や実証研究に携わる人びとから否定的な扱いを受けることがある。それは貧困問題が差し迫った問題であり、特に貧困に直面している本人や彼／彼女を支援する人びとにとって、今現在必要なのは説明ではなく、貧困を脱する眼前の手段であるからである。そのことは誰にも否定できない。

しかし、社会全体として、貧困問題に取り組もうとするとき、「貧困とは何か」を直感的・経験的に知っているだけでは十分ではない。反貧困の社会政策や戦略形成のためには、個別的な直感的・経験的な知見を言語化して一般化し、整合性のある理論として提示しなければならないことが多いのである。貧困理論は貧困の現場（反貧困の実践）に先行して成立することはないが、反貧困の社会政策や戦略の形成は貧困理論なしにはうまくいかないことが多いこともまた事実であるように思われる。貧困理論は、貧困理論だけで成立するものではなく、貧困の現場や多くの実証研究から得られた知見を説明する一側面であり、協働作業の結果の一部である。本書で参照した先行研究の多くは理論的なものが多いが、本書の構想や着想のほとんどは理論研究ではなく現場での実践や当事者の語りなどによって得られたものである。

なお、本書のみで「貧困とは何か」という問いの全てに答えることは当然できていない。だからこそ本書における論述が、貧困問題を追究する全ての人に開かれ、批判の対象となり、さらなる理論の構築のための一礎石となればと私は考えている。時間と空間を超えて皆様と協働し貧困の撲滅を目指していければと願っている。